論　文

シャロン・オウエンス「マルベリー通りの喫茶店」
―北アイルランド小説の新たな展開―

八　幡　雅　彦

Sharon Owens, *The Tea House on Mulberry Street*: A New Development of Northern Irish Fiction

Masahiko YAHATA

【要　　旨】

紛争、和平プロセス、和平合意と社会の変化に伴って北アイルランド小説のテーマも変遷を遂げてきた。1970年代から1990年代にかけては「紛争小説」が書かれ、1998年のベルファスト和平合意前後からは、紛争を振り返りながら和平の過程の中で生きる人間の姿を描いた小説が書かれ始めた。そして2000年を過ぎてからは、紛争は背景に置いただけの、日常的な人生体験をテーマにした小説が書かれ始めた。シャロン・オウエンス『マルベリー通りの喫茶店』（2003）は、ベルファストのある喫茶店の常連客たちの様々な人生体験を描いた。苦難を乗り越えて新たな人生を踏み出す彼らは、北アイルランド内外の多くの読者たちの共感を呼び、「北アイルランドは紛争が終わったら書くべき題材は無くなる」というメディアや批評家たちの見解を一蹴した。また彼らの新たな人生は、平和と発展に向けて歩み始めた北アイルランドのメタファーと見なすこともできる。そして登場人物の女性たちは、紛争小説に見られた受動的な女性たちとは違った能動的な女性たちである。

【キーワード】

北アイルランド、小説、紛争、和平、人生体験、能動的な女性、終わりなき物語

【Abstract】

The themes of Northern Irish fiction have changed as Northern Irish society has witnessed events such as the Troubles and the peace process. The so-called “Troubles novels” were written from the 1970s until the 1990s. Since a few years past 2000, novels of which the main themes are people’s simple experiences of living have been coming out. *The Tea House on Mulberry Street* (2003) by Sharon Owens is a novel about various experiences of living of the customers in a Belfast tea house. The new lives which they have attained after overcoming many hardships can be regarded as a metaphor for Belfast which is now on her way to peace and development after overcoming the Troubles. Another characteristic of the novel is the appearance of active women, which presents a striking contrast to passive women appearing in many Troubles novels.

【Key Words】
Northern Ireland, fiction, Troubles, peace process, simple experiences of living, active women, never-ending stories

1．はじめに

北アイルランドでは1969年に北アイルランド紛争が勃発して以来、紛争をテーマにした数多くの小説が書かれ続けてきた。「紛争小説」とも呼ばれたこれらの作品は世界中の注目を集めたが、1994年にいったん紛争が終結すると、一部のメディアや批評家は、北アイルランドについてはもう書くべき題材が無くなり、北アイルランド小説は終わったという見解を示したが、本稿ではこれに対する反駁を試みる。

紛争以降、北アイルランド小説のテーマはどのような変遷を遂げてきたかをたどり、新たな北アイルランド小説の展開の一例としてシャロン・オウエンスの『マルベリー通りの喫茶店』（2003）を取り上げ、この作品の中に描かれたさまざまな人間ドラマを分析する。そして、紛争以外の人間の日常生活や人生体験をテーマにしたこの作品がどのような普遍的な意義と価値を備えているかを実証したうえで、現代北アイルランド小説の可能性について言及する。

2．北アイルランド小説のテーマの変遷

北アイルランドでは1969年、アイルランド統一を要求するナショナリスト(主にカトリック)とイギリスへの残留を主張するユニオニスト（主にプロテスタント）の間で紛争が勃発し、1994年に双方の過激派軍事組織が停戦を表明するまで25年間に亘って激しい戦いが繰り広げられてきた。

この間、北アイルランドでは「紛争小説」というジャンルが生まれ、内外の作家たちが紛争をテーマにした小説を書き続けてきた。主な作品としては、ジョーン・リンガード『バリケードを越えて』(1972)、ジャック・ヒギンズ『死に行く者への祈り』(1973)、ジェラルド・セイモア『ハリーズ・ゲーム』(1975)、ベネディクト・カイリー『プロクソペラ』(1977)、メアリー・ベケット『あるベルファストの女性』（1980)、モーリス・レイチ『シルバーの住む都市』(1981)、バーナード・マクラヴァティー『キャル』(1983)、カイリー『カーミンクロスでは何も起こらない』(1985)、ディアドラ・マドゥン『隠れた症状』(1986)、トム・クランシー『パトリオット・ゲームズ』(1987)、グレン・パタソン『我が身を燃やす』(1988)、ダニー・モリソン『西ベルファスト』(1989)、ロバート・マクリアム・ウィルソン『リプリィー・ボウグル』(1989)、ブライアン・ムーア『沈黙の偽り』(1990)、デイヴィド・パーク『スペイン産のオレンジ』(1990)、ダニエル・モーニン『すべて我らの過ち』(1991)、ローナン・ベネット『異邦人に覆されて』(1992)、メアリー・コステロ『タイタニック・タウン』（1992)、オーエン・マクナミー『生き返った男』(1994)、コリン・ベイトマン『ジャックとの離婚』(1995）等が挙げられる。[1] これらの作品は、テロリスト同士の戦い、紛争の犠牲になる一般市民、宗派を超えた友情や恋愛等を描き、紛争のテーマを真正面に据えたものであった。

たとえばパタソンの『我が身を燃やす』は、紛争勃発直後のベルファストの新興住宅街に住むプロテスタントの少年マル・マーティンとカトリックの少年フランシー・ヘイガンの悲劇に至る友情の物語である。マルは両親からフランシーには近寄らぬようにと厳命されるが、好奇心と憧れからフランシーが暮らすゴミ捨て場に行き、彼と奇妙な友情を結ぶ。フランシーはたびたびプロテスタント住民を威嚇、挑発し、耐えられなくなった彼らはフランシーとその家族

に彼らの住宅街からの立ち退きを命じる。立ち退きの日、フランシーはゴミ場に捨てられた廃棄物に火をつけ、プロテスタント住民に投げつける。しかし火のついたアイルランド三色旗が逆風にあおられ、フランシーの体に巻き付き、彼は焼死する。この悲劇はマルの目の前で起こる。この小説は、プロテスタントとカトリックの間に厳然と立ちはだかる壁を描き、北アイルランド紛争の真実をえぐり出した話題作として高い評価を受けた。

ムーアの『沈黙の偽り』はテロリストの脅威を描いた。カトリックのマイケル・ディロンはベルファストの一流ホテルの経営者である。彼のホテルでユニオニスト急進派のオレンジ協会が集会を開くことになった。ナショナリストの過激派軍事組織であるIRAは彼と妻を監禁し、ディロンにホテルを爆破するよう命じる。そしてもし警察に通報したら妻を殺害すると脅迫する。激しく葛藤した末に彼はあえて警察に通報する。妻は幸い一命をとりとめる。ディロンは監禁されている時、覆面を一瞬外したIRAのひとりの素顔を見ていた。ディロンは警察から事情聴取を受けた時、その人相について告げるべきかどうか再び激しく葛藤した末に、告げる。その後彼は、身の安全のためにロンドンのアパートに移り住むが、戦慄の結末が彼を待ち受けている。この作品はスリラーとしての価値が評価され、ブッカー賞候補作にもノミネートされた。

1994年８月31日、北アイルランドではIRAが停戦を表明した。それに呼応して10月13日にはUVF、UFFを含むユニオニスト側の過激派組織集団が停戦を表明し25年に及んだ北アイルランド紛争が終結した。

この時、グレン・パタソンは、イギリスのメディアから「北アイルランドの小説家たちはいったいこれから先何について書くのか」という質問をうんざりするほど浴びせかけられた。彼らは、紛争が終わった北アイルランドはもはや小説のネタが尽きたと見なしたのである。あるイギリスのエージェントは、「北アイルランドはもう終わった」と述べた。しかしパタソンは同年の12月に『サンデー・タイムズ』に寄稿した「終わりなき物語」“Never-ending stories”と題するエッセイの中でこの見解に反論した。北アイルランドは和平への過程を歩み始めたものの将来は不透明であることを彼は示唆し、「この不確実の時代は、今までの紛争の時代同様、それに続く時代として理解を深めることが重要である。北アイルランドでは人によって和平への過程は異なる。和平への過程を通して北アイルランドは今までとは別の場所に向かおうとしている・・・北アイルランドは決して終わったなどとは言えない。私と同じように紛争の時代を生きてきた多くの作家たちが、北アイルランドでの生活について私とは極めて異なる展望を持って書き始めている。おそらくは、今までの時代に決別を告げる『過程』という言葉が、この次北アイルランドに何が起こるのかという問いかけに対する鍵を握っているであろう。過程－すなわち変化の必然性－とは人生体験そのもののことだ。過程とは、他の国同様、北アイルランドにおいても雑然として極めて人間的なものであり、終わりのない物語なのである」と述べた。[2)]

言い換えれば、パタソンは、紛争が終わったとはいえ、北アイルランドには紛争を振り返りながら人生体験や将来展望について書くべきテーマは数多くあり、他の国同様、小説のテーマになるものは永遠にあり続けるということを強調したのである。

そして彼の予言通り、北アイルランド小説は決して終わってはいなかった。紛争を振り返りつつ、北アイルランドの人々の様々な人生体験を描いた、極めて人間的な、普遍的な訴えかけを持つ数々の小説が現れ始めた。

パタソン自身の『ビッグサンダーマウンテンの闇夜』(1995)[3)]は北アイルランド問題を国際的視野から模索した意欲作である。ベルファスト出身の建設作業員レイモンド・ブラックは紛争で疲弊している北アイルランドに嫌気がさして、新しい人生を求めてフランス・パリ郊外に建設中のディズニーランドにやって来た。そこ

で彼は、作業員食堂で働くドイツ人女性イルス・クレインと、ディズニーに心酔するアメリカ人青年サムに出会う。狂人のサムは、実在しない「モーティマー・マウス」を彼のもとに連れて来ることを要求して、レイモンドとイルスを人質にとって彼らに銃を突きつけて立てこもる。奇妙な監禁状態の中で彼らは自分たちの国を去った理由、新しい人生の模索について語り合う。

ロバート・マクリアム・ウィルソンの『ユリーカ・ストリート』(1996)[4]は、「すべての物語は愛の物語である」という一文から始まり、様々な愛の物語と停戦前後のベルファストにおける多様な人間模様を描いている。主人公のチャッキー・ルーガンはプロテスタント、ジェイク・ジャクソンはカトリックだが、長年に亘って親友関係を保っている。チャッキーは、非合法な手段で金を稼いだうえに、実現するつもりもないプロジェクトのことを雄弁に語って北アイルランド政府を欺き、多額の補助金を得る。さらには大金持ちのアメリカ人女性と結婚し、手に入れた金を資本に最終的には事業を起こし北アイルランドに数多くの雇用をもたらす。ジェイクはカトリックだが、彼らの急進派であるリパブリカンを痛烈に批判する。誇張と風刺に満ちた作品だが、この作品に描かれた様々な愛の物語のうち最大のものは著者のベルファストに対する愛といえよう。

デイアドラ・マドゥン『暗闇の中にひとりひとり』(1996)[5]は、ベルファスト近郊の小さな町の、カトリック家庭出身のケイト、ヘレン、サリーという３人姉妹の生き方を描いている。ケイトはロンドンで雑誌社に勤めており、未婚でありながら子どもを宿している。ヘレンはIRAの温床であるベルファストのフォールズ・ロードで弁護士を務めテロ事件を扱っている。サリーは地元で学校教師をしており、カトリックの因習的な環境の中に身を置いている。彼女たちの父親はテロの犠牲になって死亡していた。IRAが停戦を表明する直前の１週間、彼女たちは紛争に苦しめられた過去を回想しながら、自分たちのこれからの人生について模索する。

バーナード・マクラヴァティー『装飾音』(1997)[6]は、北アイルランド出身のひとりの女性が作曲家として自立するまでの過程を描いている。この作品には文字通りの装飾音に加え、メタファーとしての装飾音がいくつも登場する。主人公キャサリン・アン・マッキーナはデリー州の小さな村のカトリックの家庭に生まれた。ベルファストの大学で音楽を専攻し、音と音との融合で曲を美しくする装飾音の技法について学ぶ。その後、彼女はロシアへの留学、恋愛、出産、離婚を経て、スコットランドで、ひとりで子どもを育てながらの音楽創作活動に専念する。彼女は、これらの人生体験をもとに、過去と現在、東西世界、そして北アイルランドのナショナリストとユニオニストとの融合を願う一大楽曲を作り、大きな成功を収める。「音楽小説」ともいわれたこの作品はブッカー賞候補作にノミネートされた。

パタソン『インターナショナル・ホテル』(1999)[7]は、かつてベルファストに実在した同名のホテルを舞台に、悲哀に満ちた人間ドラマと、紛争によって彼らの夢が粉微塵に砕かれた事実と、停戦合意による未来への希望を描いている。このホテルには北アイルランド内外から様々な客が訪れていた。裕福だが欲求不満に苦しむアメリカ人夫妻、怪我で出場の機会を失いバーで酒に浸るイングランド・プレミアリーグのサッカー選手、売れない人形劇師、次々に失恋を繰り返す女性。彼らの悲哀に満ちた人間ドラマが延々と続く。彼らは、明日はきっと良くなると信じて生きていた。しかし彼らの夢は紛争によって打ち砕かれる。そして停戦合意。紛争で姿を消したホテルの跡地に、この物語の語り手であるバーマンのダニー・ハミルトンを始めとするかつての従業員たちが集まり、過去を回顧しながら再び明日への希望を抱く。

「紛争小説」が紛争を真正面から描きその悲惨さを訴えるものであったのに対し、1994年の停戦合意以降に出版されたこれらの小説は、紛争を乗り越えて新たな人生を切り開こうとする前向きな登場人物たちを描いたものであった。

すなわち、パタソンの言葉を借りれば、和平の過程の中で変貌しつつある北アイルランドにおける「雑然として、極めて人間的な」人生体験を描いたものであった。

1994年に停戦合意が成立したとはいえ、IRAはイギリス政府の生ぬるい対応に業を煮やして２年後の1996年、ロンドンでテロ活動を再開した。これで北アイルランドは再び泥沼の紛争に突入するかに思われたが、紛争に疲弊した一般市民の平和への願いは根強く、北アイルランドのみならず、南のアイルランド、イギリス、そしてアイルランド系移民の多いアメリカも参画して和平プロセスを推進した。その甲斐あって1998年４月、ベルファスト和平合意が成立し、このニュースは世界中を駆け巡った。この年の８月には、ティローン州のオマーで和平合意に反対する「真のIRA」が仕掛けた爆弾で29人が死亡するという、北アイルランド紛争史上最悪の惨事が起きたが、人々は平和への歩みを止めず、北アイルランドからは確実にテロ事件は減っていき、紛争時には日常茶飯事のように見られたイギリス兵士も次々と撤退を始めた。そして同年10月には、北アイルランド首相でアルスター・ユニオニスト党（UUP）党首のデイヴィド・トリンブルと、ナショナリストの穏健派である社会民主労働党（SDLP）党首のジョン・ヒュームが、和平合意推進の功績が認められノーベル平和賞を受賞した。

和平合意によってユニオニストとナショナリストが平等の権力を有する北アイルランド自治政府が誕生したが、IRAが和平合意の条文に明記されている武装解除に応じず、自治政府は４度の崩壊を繰り返した。しかし2005年にはIRAが武装解除を実施し、自治政府は復活しさらに平和への弾みがついた。

このような平和への動きに伴いベルファストは都市開発が進み、世界中から観光客が訪れるようになった。そして、結果的にはリヴァプールにその栄誉を奪われたが、「2008年度ヨーロッパ文化都市」に立候補するまでになった。2006年に出版されたアイルランド観光ガイドの中でベルファストは次のような紹介がなされている。

ベルファストは活気に溢れている。巨大投資が、和平プロセスによって醸し出された楽観主義と相まって、ベルファストをブームに沸く町へと変貌させた。そしてかつての「爆弾」や「銃弾」といった評判は、テン・スクエアやマルメイソンといったしゃれたホテル、ロスコフやマイケル・ディーンといった気品のあるレストラン、リズバーン・ロードに立ち並ぶ流行の先端をゆくブティック等に代表されるように、ファショナブルなベルファストに取って代わられた。[8)]

このように北アイルランドが平和に向かうに従って北アイルランド小説もさらに新たな展開を見せ始めた。すなわち、紛争は背景に置いただけの、日常生活や人生体験をメインテーマに据えた小説が現れ始めたのである。

ジョー・ベイカー『根無し草』(2002)[9)]は、ベルファストを舞台にひとりのイギリス人女性のアイデンティティー模索の過程を描いた。主人公クレアはイングランド北部ランカシャー州の小さな田舎町に生まれた。クレアが母親から聞いた話では、母親はユダヤ人でイギリス人家庭に養子に出され、キリスト教徒として育てられたということだった。クレアは子供の頃ユダヤ人ということで激しいいじめにあう。オックスフォード大学に進学するが、友人はできず孤独にさいなまれる。ある時、大学が主催する絵画講座で、アランという、ベルファスト出身で、哲学で博士論文を書いている男子学生に出会う。彼もまた、ベルファストに自分の居場所を見いだせなくてオックスフォードにやって来た、ある意味では「根無し草」だった。ふたりは恋に陥る。アランは大学講師としてベルファストに戻ることになり、クレアも同行しアパートで同棲を始める。クレアはパブのウェイトレスの仕事に就くが、アランとはすれ違いの生活が続く。しかもクレアはパブで客からのセクハラにあい、苦しむ。そんな時、ポールという同

僚のウェイターが、酔って暴れる客を止めようとして負傷し、クレアは上司のガレスから頼まれてポールを家まで送る。クレアはポールの恋人グレイニーと友人同士だった。グレイニーは不在で、クレアがポールの手当てをし、その後ふたりは肉体関係を結んでしまう。クレアは煩悶し、彼女の故郷であるランカシャーの田舎町に帰る。そこで彼女は、幼馴染の女友達が夢破れて地元のパブで働いているのを知る。さらに母親からは家族に関するショッキングな秘密を知らされ、母親もまた「根無し草」であることを悟る。故郷にも居場所を見いだせなくなったクレアは再びベルファストに戻る。彼女は足首を剃刀で傷つけ血を流し、自分が生きていることを確かめる。アランとは別れ、そして恋人を寝取られたグレイニーからは激しく責められる。行き場のなくなったクレアを救ったのはパブの上司ガレスだった。耐えながら働くクレアに住まいを提供し、ウェイトレスからカウンターのビール給仕係へと昇進させる。クレアは美術大学に入り直すことを決意し、鏡に自分を映しながら自画像を描き始める。かくして彼女はベルファストこそ自分が生きる場所だと確信し、「根無し草」からの脱却を心に誓う。

クレアが自己のアイデンティティーを模索する姿は、いわば和平の過程の中で自己のアイデンティティーを模索するベルファストとオーバーラップする。過去、北アイルランド小説においては登場人物たちが北アイルランドを去って他国に行くというケースが多かったが、『根無し草』は、イギリスを去ってベルファストにやって来て自己発見を決意する女性を描いたという点においては画期的な作品であり、北アイルランド小説の新たな展開を象徴する作品ともいえよう。

そして「活気に溢れたファショナブルなベルファスト」における人生体験、日常生活を描き、北アイルランド小説における新たな展開を如実に示したのがシャロン・オウエンスのベルファスト三部作、『マルベリー通りの喫茶店』(2003)、『マグノリア通りのダンスホール』(2004)、『メイプル通りのパブ』(2005)である。[10]

3.『マルベリー通りの喫茶店』に描かれた様々な人生体験

著者シャロン・オウエンスは1968年ティローン州オマーのカトリックの家庭に生まれた。1988年にアルスター大学ベルファスト校に入学し美術を専攻した。「なぜ私は違うベルファストについて書くことを選んだか」と題するエッセイの中で、彼女は、紛争はごくわずかな背景に置いただけの、普通の人々の人生体験や日常生活をテーマとする作品を書くようになった経緯について述べている。[11]

子どもの頃、ずっとニュースで紛争の映像を見慣れていた彼女は、ベルファストではスケッチブックを1冊完成させないうちに撃ち殺されてしまうのではないか、誰かに「カトリックかプロテスタントか」と尋ねられて違った方を言ったら殴り倒されるのではないかと恐れていた。しかし予期に反して彼女はベルファストではすばらしい経験をした。彼女が住んだ南ベルファストは、市の中心部まで歩いてわずか20分の距離だったが、閑静で、平和で、美しい場所だった。喫茶店でお茶を飲み、後に夫となるダーモットとレストランで食事をし、アートギャラリーやアルスター博物館を訪れた。近くには美しい公園やバラ園があり、週末には手をつないで散歩し、将来の計画について話し合った。ベルファストで出会う人々の癖のある英語訛りも気に入った。半年でベルファストは彼女の故郷になった。彼女はベルファストで成長したと思っている。避けた方がよい場所や通りを確認し、ラジオでテロ警報を聞いた。しかし彼女は政治にはさほど関心を示さず、両宗派の友人を作り、お互い共通のものを多く持っていることを発見し、美術や音楽について語り合った。みんな同じただの人間で、なんらかの成長を目指しているのだということを実感した。5年間の借家住まいの後、ダーモットと結婚し、ベルファストの南部郊外に家を買い、一人娘が生まれた。今でも暴動が起きる時があるが、彼

女が知っているベルファストはニュースで報道されているベルファストとは異なる。彼女が知っているベルファストは威厳のある場所で、紛争に苦しみ、争いには辟易した親切で思慮深い人々が数多くいる。彼らは普通の人々で、普通であり続けようと心に誓っている。それゆえに彼女はベルファストでの生活を愛している。

オウエンスの小説に登場してくるのはそのような普通の人々で、彼らは様々な人生体験を織りなす。

『マルベリー通りの喫茶店』の主人公はペニー・スタンレイとその夫ダニエルで、ペニーの両親から引き継いだ「マルドゥーン喫茶店」を経営している。マルベリー通りは架空の通りで、実際はクイーンズ大学ベルファスト校の南の、マローン・ロードとリズバーン・ロードを結ぶ横通りのうちのひとつである。1999年から2000年にかけて彼らの喫茶店にはいろんな客が訪れていた。

ベアトリス・クローリーとアリス・クローリーは双子の姉妹だった。彼女たちは第二次世界大戦中、父親が戦地に赴いている間に生まれた。両親は色白で金髪なのに、近所の人々は彼女たちの「蜂蜜色の肌と真っ黒な髪」に驚いた。彼女たちの母親エリザは敬虔なキリスト教徒で、奇跡を信じており、「神がふたりの美しい娘を授けて下さった」と彼らに語っていた。二人は教師になり、一生独身を通し、今や悠々自適の年金暮らしの身分だった。彼女たちは父親を戦争の英雄と見なし、１週間に１度両親の墓に花を供えていた。そしてマルドゥーン喫茶店の窓から10代の母親たちが赤ちゃんをベビーカーに乗せて歩いているのを見ながら、「私たちの愛する父親がこんなあばずれ娘たちのために戦っていたなんて。私たちの時代だったらとっくに施設送りになっていたわよ」と嘆くのだった。

彼女たちは市主催の戦争記念展覧会の開催のために募金を求めて歩いていた。いつも募金を求めてやって来る彼女たちにダニエルはいい顔をせず、彼女たちのことを「ゾッとするクローリー姉妹」と呼んでいたが、ペニーは常連客である彼女たちの求めに応じて募金するのだった。

彼女たちの功績が認められ、彼女たちはベルファスト市長から戦争記念展覧会のオープニングセレモニーに招かれることになった。ダニエルからの「戦時中に母親が身につけていた宝石を身につけて行ったら」という提案を受け入れて、彼女たちは母親の遺品の入ったトランクを調べた。すると彼女たちの出生証明書が出てきて、彼女たちは母親からは父親が出征してから６ヶ月後の1940年に生まれたと教えられていたのに、実際には1941年生まれであったことを知る。続いて出てきた１枚の写真から、自分たちの出生の秘密について知り愕然とする。

オープニングセレモニーの当日、ステージには1940年代の衣装を身につけ、イギリス空軍の帽子をかぶった「ミス北アイルランド」が登場し、腰を振りながら歩いた。それを見たクローリー姉妹は卒倒しそうになった。翌日の『ベルファスト・テレグラフ』には、ミス北アイルランドを中央にして、彼女たちは脇に追いやられた写真が掲載された。アリスは自分たちの不格好な写真に怒り、戦争と母親を非難するが、ベアトリスは「もし戦争がなければ私たちは生まれてこなかったかもしれないのよ」となだめ、クリスマスに実際の父親の生地イスラエルに旅行することに決め、彼女たちの物語はハッピーエンドとなる。

ブレンダ・ブラウンは売れない画家で、マルドゥーン喫茶店に隣接するみすぼらしいアパートに住んでおり、失業手当で暮らしていた。喫茶店ではいつも１杯の紅茶を飲みながら、映画俳優ニコラス・ケイジにファンレターを書き続けていた。そして彼女の絵が売れないのは、彼女の平凡な名前のせいにしていた。職業案内所からは今までに７つの仕事を紹介されたが、いずれも面接で喧嘩を売って不採用になっていた。しかし職業案内所からこれ以上働かなかったら失業手当の支給を止めると警告され、大型スーパーマーケットのゴールウェイ支店で働く

ことにした。しかし初日から客との間でトラブルを起こしてしまい即刻解雇を言い渡される。その腹いせに彼女はメロンを次々と放り投げて幾人かの客を負傷させたうえにライバルのスーパーマーケットの方がずっといいと場内アナウンスで連呼し、警備員に捕らえられる。支店長は、熟慮の末、彼女を警察に引き渡すことはせず無罪放免にする。

ある日、ブレンダはひとりの女性がアパートの彼女の部屋を外から見つめているのに気づく。ニューヨークでインテリア関係の雑誌の編集長をしているクレア・フィッジェラルドという女性で、かつてベルファストの美術大学に通っていた頃、ブレンダが今いる部屋に住んでいたという。クレアは、ブレンダが描いた「恋する人を待ちながら」と題する自画像を買う。

その後、ブレンダが友人たちとゴールウェイで開いた展覧会でブレンダの絵が注目を浴び、ゴールウェイの画廊が彼女の絵の個展を開きたいと申し出てきた。有頂天になった彼女は、今まで彼女を無視してきたベルファストの画廊に次々に電話をかけて罵倒を浴びせ、ジンを１日中飲んでヒーターを消し忘れて晩方実家に戻る。その間にコードがショートして火事になり、彼女のアパートと隣のマルドゥーン喫茶店を全焼してしまう。ゴールウェイの個展に出品する絵もすべて焼けてしまい、彼女はもう絵とは縁を切り、家を出てきちんとした仕事に就くことを決意する。そして南のアイルランド・コネマラでアイルランドの国営テレビに雇われて雨量計測の仕事をすることになり、恋人ができハッピーエンドを迎える。

1982年、19歳のクレア・フィッジェラルドはベルファストの美術大学に入学し、マルドゥーン喫茶店の隣のアパートに住んだ。港の近くのナイトクラブに踊りに行った時、22歳の大学４年生ピーター・プレンダーガストに出会いお互い一目惚れする。クレアはピーターを彼女のアパートに招き、音楽を聞きながら一夜をともに過ごす。そして翌日、マルドゥーン喫茶店で一緒に食事をして再会を約束して別れる。ピーターはクレアに、彼の住所と電話番号を、一緒に聴いた音楽のカセットテープに書いて渡す。週末で、クレアはそのまま実家に帰省するためにバスに乗る。

すると、当時は北アイルランド紛争真っ直中の時代で、暴徒がクレアの乗ったバスに石を投げつけ、それは窓ガラスを破ってクレアの頭を直撃し、彼女は多量の出血をし病院に担ぎ込まれる。そしてピーターの住所と電話番号を記したカセットテープは行方不明になる。

クレアの両親は、娘を巻き添えにした紛争に嫌気が差しイギリスに移住することを決意する。退院後、クレアはピーターの大学を訪れ必死に彼を探すが見つからず、ベルファストを去り、イギリスの大学に通うことになる。一方、ピーターは彼女のアパートを訪れるが不在で、マルドゥーン喫茶店に立ち寄り、ペニーにクレア宛ての伝言と彼の実家の住所を残し、クレアが来たら渡して欲しいと頼む。ふたりはお互い相手に捨てられたと誤解したのである。

クレアは大学卒業後、アメリカに渡りニューヨークのインテリア関係の雑誌社に勤め、編集者として成功する。1999年、彼女は取材のためにベルファストを訪れる。ピーターのことが忘れられない彼女はマルドゥーン喫茶店を訪れ、ペニーに彼のことを尋ねる。ペニーは記憶の糸をたぐり、がらくたの入った引き出しをこじ開ける。するとそこからピーターが17年前にクレアに宛てた伝言と、彼の実家の住所が出てきた。そして彼女が彼の実家を訪れるとピーターはボストンに住んでいることを知らされる。クレアはピーターに連絡を取り、彼がニューヨークの彼女の出版社に会いにやって来てロマンスは成就する。

ヘンリー・ブラックスタッフは、イギリスの鉄道事業で成功した伯父から家と多額の遺産を受け継ぎ、古本屋を経営しながら売れない小説を書いていた。彼の店に稀少本を求めてやって来たオーロラとお互い一目惚れして結婚した。オーロラは女学校の副校長で、国語と演劇が専門の彼女は19世紀のイギリス文学の振興に生涯

を捧げ、「ブロンテ輪読会」という文学サークルを作った。ヘンリーは41歳、オーロラ45歳でふたりに子どもはいなかった。ブロンテ輪読会は人気を博し、新聞でも報道され、入会希望者がさらに増えたために、オーロラは、家の庭にあるヘンリーが植物を育てている温室を取り壊し、ブロンテ輪読会のためのサークルハウスを作る計画を立てる。

ヘンリーは反対するが妻に聞き入れてもらえず、悩みを抱えてマルドゥーン喫茶店を訪れる。ペニーに悩みを打ち明けたところ、「あなたは優しい。奥様が羨ましいわ」と言われ、彼はオーロラに好きなだけ金をかけてサークルハウスを作るように言おうと決心する。そうすれば妻は金額を知ったとたん度肝を抜かしてあきらめるだろうと期待する。しかしそれは逆効果だった。オーロラはそれを聞いたとたん大喜びし、業者を呼びどんどん話を進める。ヘンリーの小説が３つの出版社から却下される間にブロンテ輪読会用のサークルハウスの建設は進み、BBC のドキュメンタリー番組でも放映されかなりの視聴率を稼ぐ。オーロラはプロデューサーのデイヴィド・クーパーと昵懇の間柄になり、ふたりで頻繁に食事や演劇に行くようになりついにはホテルに入る。

一方、ヘンリーも妻から気持ちが遠ざかるようになり、足繁くマルドゥーン喫茶店に通い続ける。そこで彼は向かいの花屋の店主で、コネマラ出身のローズ・トンプソンという女性と知り合う。彼女は４年前に結婚していたが破綻し、夫の家に荷物を取りに行くと夫の若い愛人に出くわす。これで夫とよりを戻すという一縷の望みも絶たれ沈んでいる時にヘンリーと出会い、お互い惹かれ合う。ヘンリーはローズに愛を告白し、妻に置き手紙を残して離婚し、小説家の夢もあきらめコネマラの自然の中でローズと一緒に暮らし始める。

オーロラがブロンテ輪読会のためのサークルハウスの建築を依頼したのはアーノルド・スミスという敏腕営業マンだった。彼には妻サディーの他にパトリシア・コールドウェルという若い愛人がいた。彼女は市の中心部で土産物店を営んでおり、割られた店の窓ガラスの修理をアーノルドの会社に頼んだのがきっかけで彼と知り合い、不倫の関係を続けていた。そして彼女は、アーノルドの太った妻のことを「スポンジ・サディー」と呼んで馬鹿にしていた。

そんなサディーの唯一の気晴らしはマルドゥーン喫茶店で御馳走を食べることだった。そしてかねてから夫が怪しいと思っていた彼女は、会社の彼の事務室に忍び込み、書類棚の背後に身を潜め、彼の行動を監視する。すると夫がパトリシアを連れ込み情事にふけりながら、ふたりで散々彼女の悪口を言うのを目の当たりにする。そればかりか、夫はオーロラにサークルハウスが売れたことを祝って、サディーを欺いてパトリシアを連れてパリへ旅行に出かけると言う。

サディーは二人に復讐を誓う。パリに出発する朝、彼女は夫のジャケットのボタンをもぎ取り、カッターシャツをアイロンで焦がし、バッグの中にポルノ雑誌を潜ませ、パスポートを隠す。おかげですったもんだの末彼はやっと空港に駆けつけるが、予定の便には乗り遅れ、次の便で夜遅くパリに到着する。しかしホテルのバーもレストランも閉まっており夕食を取ることが出来ず、おまけに身に覚えのないポルノ雑誌をパトリシアに発見され、彼女の激怒を買う。

サディーの復讐は続く。アーノルドは会社から1999年度の年間最優秀セールスマンに選ばれ、妻とともにパーティーに招待される。社長がアーノルドに受賞スピーチを求めたところ、サディーがマイクをもぎ取り、パトリシアとの不倫のことを暴露する。そればかりか、夫は会社を辞めて独立するつもりだ、社長を始め会社の人間のことをひどいあだ名で呼んでいる、自分は夫と離婚するつもりだとまくし立てる。

アーノルドはパトリシアのアパートに駆け込む。サディーは二人の不倫の現場をカメラで隠し撮りし、弁護士に証拠写真を渡す。これでめでたく離婚は成立し、彼女が家を手にして、アーノルドは追い出されることになる。そしてサディーは、火事の後、「スタンレイ喫茶店」

と名前を変えて新規開店したペニーとダニエルの喫茶店のウェイトレスとして働き始める。

一方、アーノルドはパトリシアからも別れを告げられ、ベルファストを去る。そしてファーマナ州エニスキレンに移住し湖のほとりで新たなビジネスを始め、多くの顧客を得る。

このように多くの常連客に癒しを与えているマルドゥーン喫茶店の経営者夫妻のダニエルとペニーだが、結婚後17年が経ち、彼らも夫婦の危機を迎えていた。

ダニエルは複雑な生い立ちだった。彼の父親は、彼がまだ母親テレサの腹の中にいる時に彼女を捨ててアメリカに渡った。そして母親は市の中心部のパブで働きながらダニエルを育て、マグノリア通りの小さな家に引っ越した。しかし母親もまたもダニエルが４歳の時、彼を捨ててアメリカに旅立った。彼は伯母のキャスリーンに育てられ、労働と節約を植え付けられた。十代で調理専門学校に通った後、様々な飲食店で奴隷のように働き、24歳の時にはベルファストの最高級ホテルの料理人になった。しかしいくら働いても貯蓄は増えず、ある時、魔が差してホテルの客室用の石鹸とシャンプーを盗む。見つからなかったことに味を占めてダニエルの盗癖はエスカレートしてゆき、ホテル備え付けの物や、金持ちの宿泊客の身の回り品を次々に盗む。そしてそれらを隣町のバンガーで売ろうとしていたところを同僚に見つかり、支配人の知るところとなり、ホテルを解雇される。

天涯孤独の身となったダニエルは、金持ちの未亡人あるいは離婚した女性との出会いを求めてナイトクラブに足を踏み入れる。そこにいたのがペニー・マルドゥーンで、彼女はダニエルを見て一目惚れし、彼に声をかける。二人は意気投合し、ダンスをし、ウェイターたちの羨望を集める。1982年の大晦日ふたりは結婚する。ダニーはもうすぐ31歳になるところで、ペニーは18歳だった。ペニーは年老いた両親から育てられた一人娘で、両親が経営するマルドゥーン喫茶店の仕事を手伝っていた。そして結婚と同時にダニーとともに喫茶店の経営を引き継ぐ。

17年が過ぎ、ダニーは48歳、ペニーは35歳になっていたがまだ子供はいない。そして価値観の違いで二人の仲はギクシャクしている。ペニーは子供を生み、喫茶店を改装し、従業員を雇いたがるが、ダニエルは「すべてぜいたく」とはねつける。

ピーター・ブレンダーガストがクレア・フィジェラルドに残した伝言が喫茶店の中の引き出しの中から出てきたおかげでクレアはピーターと連絡を取ることができ、彼女はそのことをペニーに知らせるためにアメリカから電話をかけてくる。ペニーがこの嬉しい知らせを聞いた日、リチャード・アレンという不動産業者が喫茶店に立ち寄る。ダニエルは不在で、この不動産業者はペニーに喫茶店を売るつもりはないかと持ちかける。ペニーは、彼のハンサムないでたちに惹かれ、クレアからの嬉しい知らせで感情が高ぶっていたために、彼とのロマンスを期待して、喫茶店は売るつもりはないが家を買うことを考えているとうその話をする。

ペニーはリチャードに、彼の住むラガン川沿いの高級マンションを案内され、二人は肉体関係に及ぶ。逢瀬を重ねるうちにリチャードはおよそ15年前、ペニーの夫ダニエルにマグノリア通りの一軒家を売ったことを思い出し、彼女に告げる。ペニーはダニエルには別の妻がいると思い込み、彼を激しく責める。そして自分自身の情事を告白したうえで、彼を喫茶店から追い出し、離婚の手続きを始める。ダニエルはマグノリア通りの家に逃げ込むが、喫茶店のオーブンの火を消したかどうか気になり、戻ってくる。すると、ブレンダ・ブラウンが消し忘れたヒーターの火のためにブレンダの住むアパートが全焼し、隣の喫茶店に燃え移っていた。ダニエルは命からがらペニーを救い出し、マグノリア通りに彼が買った家の真相を話し、彼女の誤解を解く。火事から６ヶ月後、彼らの喫茶店は「スタンレイ喫茶店」と名前を変えて新築開店する。その数ヶ月後にはペニーの妊娠が判明し、彼らもまたハッピーエンドを迎える。

4．新たな人生が示す新たな北アイルランドのメタファー

マルベリー通りの喫茶店は世界中どこの国にもありそうな喫茶店である。悩みを抱えた多くの人々が経営者夫婦との会話に癒され、おいしい料理からエネルギーを得て、苦難を乗り越えて新たな人生を踏み出す。その意味では普遍的な魅力を持った小説である。

またこの作品の時代設定は、ベルファスト和平合意が成立した翌年の1999年と2000年の２年間である。それぞれの苦難を乗り越えて新たな人生を踏み出す登場人物たちは、紛争を乗り越えて新たな発展を遂げようとするベルファストあるいは北アイルランドのメタファーと見なすこともできるだろう。そして紛争はごくわずかな背景として登場してくるだけとはいえ、そこからは著者シャロン・オウエンスの紛争解決に対する心からの願望が読み取れる。

たとえば、クローリー姉妹が戦死した父親について語る時、アリスは怒りながら、「もし戦争とか、文化とか、誇りとか、国家とか、ばかげた忌々しい国旗とかがなければ私たちの父親は前線で命を危険にさらす必要などなかったのよ」と述べる。原文では、“If it wasn't for war and culture and pride and nationality, and stupid bloody *flags*, our dear father wouldn't have had to risk his life on the front line,”[12] となっており、「国旗」の部分にイタリック体が用いられ強調されている。北アイルランドでは今でもイギリス国旗、アイルランド国旗の掲揚をめぐってしばしば対立が起きている。その対立に関する著者の強い嫌悪感がにじみ出ている。その後、クローリー姉妹は自分たちの出生の秘密を知った時の苦悩を乗り越えて、道で出会う初対面の人々にも気軽に挨拶するようになる。そしてアリスは「彼らもみんな人類の一部。人間はみんななんらかの形でお互い結びついている」と自分に言い聞かせる。ここには、北アイルランドの住民たちが宗派の違い、政治信条の違いを乗り越えて結びつくことに対する著者の願いが暗示されているともいえよう。

またオーロラ・ブラックスタッフがブロンテ輪読会のテレビ放送のためにデイヴィド・クーパーと初めて会ってレストランで食事をした時、クーパーは彼女に、「ふたりで力を合わせて、ベルファストには人々が思っている以上のものがあることを他の世界に示してやりましょう。爆弾や、反乱や、国旗問題や、ヒステリー以上のものが」[13] と熱っぽく語る。

そしてゴールウェイの画廊から個展の誘いが来て有頂天になったブレンダ・ブラウンはニコラス・ケイジの肖像画を描きながら、「ニコラス、私たちふたりで世界中に示してやりましょう。私たちふたりの才能を合わせて世界を救って、そして重要なものは芸術と音楽と映画と愛だけだということを世界中に示してやりましょう。そうすれば戦争や、つまらない論争も無くなってすべてが完璧になるわ」[14] とカンバスに語りかける。

これらの言葉は著者オウエンスの平和への願いを示唆している。彼女が平和への願いを強く持つに至ったのは、少女時代に体験した紛争の恐怖ゆえだろう。2010年２月３日の『ベルファスト・テレグラフ』に寄稿した「過去の影が私たちの未来を形作ることを許してはならない」と題するエッセイの中で、彼女は過去の体験について次のように紹介している。

政治問題が私の子供時代を台無しにした。もっと正確に言えば宗派対立という政治問題が。ある時期、私は、ロイヤリストの殺し屋たちが、夜、私を襲いにやって来た時のために枕の下にパン切りナイフを置いて寝ていた・・・私は、のどを切り裂かれて血まみれになることや、リンチ集団の叫声や、IRA の爆弾で粉微塵に吹き飛ばされる恐怖の中で生きることから解放してくれるものは「死」だけだと思っていた。私は学校へ行く途中、装甲車がどっしりと構えて止まっているのをよく見た。私は、もし兵士を見たとしても突然走って逃げ出してはいけないことを知った。[15]

これは、『マルベリー通りの喫茶店』に描か

れた、好意とユーモアに溢れ、ロマンスと夢に満ちた人生体験からはかけ離れた恐怖の体験である。このような恐怖の体験が、豊かな感性を備え、芸術、音楽、文学、そして人間を愛するオウエンスに『マルベリー通りの喫茶店』のような心温まる作品を書かせたのであろう。すべての登場人物が苦難を乗り越え新たな人生を踏み出すように、マルベリー通りの喫茶店もまた、火事で焼け落ちた後、新築開店し未来への一歩を踏み出す。この喫茶店自体も、和平合意を経て新たな未来へと一歩を踏み出したベルファストあるいは北アイルランドのメタファーと見なすことができるだろう。

5．受動的な女性から能動的な女性へ

『マルベリー通りの喫茶店』を始め、紛争以外の日常生活や人生体験をテーマとする新たな北アイルランド小説のもうひとつの特徴は、能動的な女性たちが数多く登場してくることである。

M.E. デイヴィーは、アイルランドは特に女性を「家庭」や「家事」に結びつけてきた国で、1970年代から1980年代の女性解放運動は南のアイルランドでは大きな影響力を持ったが、北アイルランドでは紛争のために女性を家庭と切り離そうとする動きは著しく阻害されたと指摘する。[16)]

これは小説においても明らかで、1980年に出版されたメアリー・ベケットの短篇小説集『あるベルファストの女性』がその顕著な例として挙げられる。「慰安旅行」“The Excursion”では、田舎町の農業青年部がダブリンへの慰安旅行を計画する。エレナーは参加したがったがなかなか夫に切り出せないでいると、夫の方からこの話を持ち出し、彼が参加すると言う。エレナーは譲歩し、夫がいない間ひとりの時間を楽しもう、そして彼が帰ってきたらダブリンの話を聞いて最近疎遠になっている二人の仲を回復しようと決心する。ところが夫はダブリンの駅で降りた後、向かいのパブで一日中酒を飲んで過ごし、酔いつぶれて知人たちに介抱されて帰宅し、暖炉の近くの椅子に倒れ込む。怒りに震えるエレナーは夫を火に押し込んで殺してしまいたい気分に襲われる。

「教師と爆弾」“The Master and the Bombs”は、結婚生活に幻滅する妻と、現実から逃避するために爆弾犯を偽り投獄される夫を描いている。ヘレンはマシューの教師という職業に憧れて結婚する。しかし彼は保護者や神父との対応に悩まされ、視学官からは批判され、沈痛な表情で帰宅しヘレンに慰めを求めるが、彼女は嫌悪感を覚えるだけである。会話はなく、お互いの孤独感を埋めるために４人の子供を儲ける。しかしマシューは育児を放棄し、二人の仲はますます疎遠になる。ある時、マシューの学校に爆弾が仕掛けられ、彼は警察から尋問され、「自分がやった」と偽り逮捕される。

表題作の「あるベルファストの女性」“A Belfast Woman”では、幼少時から紛争の真っただ中を生き続けるメアリー・ハリソンが激動の人生を回顧する。彼女が幼少時の1921年、アイルランド独立戦争の中でプロテスタント過激派から彼女の家は焼き打ちの脅迫を受ける。そして紛争がピークに達した1970年代に再び彼女の家は焼き打ちの脅迫を受ける。息子はイギリス兵との間でトラブルを起こし、娘はカナダに移住する。そして外国からの北アイルランドに対する偏見に関して、メアリーは「哀れで無力な人々を責めるのは正しくない。私たちの大半はおとなしく暮らし、現状の生活に耐えているだけだ」と反駁する。

これらの女性たちは、紛争によって人生が左右され、家庭の中、あるいはナショナリズム、ユニオニズムの殻の中に閉じ込められた、いわば受動的な女性たちである。他にも、1986年出版のディアドラ・マドゥンの『隠れた症状』の主人公テレサが受動的な女性の例として挙げられる。彼女はクイーンズ大学に学び、知的職業を目指す、一見、能動的な女性である。しかし彼女の最愛の双子の兄弟フランシスがテロリストの仕掛けた爆弾で命を失う。敬虔なカトリックの信者である彼女は友人に向かって、「私は彼なしで生き続けなければならない。私は神を

信じ続けなければならない。善良なる神を、私を愛し慈しんで下さる神を信じ続けなければならない」と泣きながらに叫び、現状に甘んじる。

もちろん例外もある。1992年に出版のグレン・パタソンの『ファット・ラッド』は、紛争が続く中で、ベルファスト出身のプロテスタントの青年ドリュー・リンドンが自己のアイデンティティーを模索して彷徨する様を描いた小説である。ドリューの恋人となるケイ・モリスはデザイン会社を経営し、エネルギーに溢れ、ベルファストに誇りを持ち、後の和平の進展とベルファストの発展を予感させるような女性である。

そして1998年のベルファスト和平合意成立前後から小説においても徐々に能動的な女性が登場するようになる。前述した、1997年出版のバーナード・マクラヴァティー『装飾音』の主人公で、紛争を土台に作曲家として成功するキャサリン・アン・マッキーナや、2002年に書かれたジョー・ベイカー『根無し草』の主人公で、幾度もの自己喪失の苦悩を乗り越えてベルファストで自己のアイデンティティーを見いだそうと決意するクレアがその例として挙げられる。

『マルベリー通りの喫茶店』にも多くの能動的な女性たちが登場する。主人公のペニー・スタンレイを始め、クローリー姉妹、ブレンダ・ブラウン、クレア・フィッジェラルド、オーロラ・ブラックスタッフ、ローズ・トンプソンが様々な苦悩を乗り越えて能動的に生きる女性たちである。そしてこの作品に続く『マグノリア通りのダンスホール』、『メイプル通りのパブ』にも能動的に生きる女性たちが次々に登場する。

『マグノリア通りのダンスホール』の主要登場人物のひとりであるマリオンはダンスホールの経営者ジョニー・ホーガンとの間にデクランという男児を儲けるが、ジョニーに捨てられる。その後マリオンは、彼女を優しく見守ってくれたエディー・グリーンウッドと結婚する。そしてあくまでデクランをエディーと自分の子として育てようと決意する。メイプル通りのパブを経営するのはジャック・ボーモントとその妻リリィーである。リリィーは、パブを買収しようとする開発業者に勇敢に立ち向かう。

北アイルランド紛争が終結し、多くの女性たちが家庭や、ナショナリズム、ユニオニズムの殻を打ち破ることが可能になったために小説においてもこれらの能動的な女性たちが登場するようになったのであろう。

6．おわりに

苦難を克服して新たな人生へと乗り出す勇気ある人物たちを描いたこのオウエンスの「ベルファスト三部作」、そしてそれに続く彼女の小説はアイルランド、イギリスで成功を収め、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、ドイツ、イタリア、フランス、デンマーク、オランダ、トルコ、ポーランド、ロシア、リトアニアでも出版され、数多くの読者の共感を呼んでいる。[17]

現在、北アイルランドにはオウエンスの他にも、紛争以外の人間の日常生活や人生体験をテーマにした話題作を次々に発表している女性作家たちがいる。たとえば、『誘惑』(2004)、『夢の船』(2008)のマーティナ・デヴリン、『雨の日々と火曜日』(2007)のクレア・アラン、『私の手を最初につかんだ手』(2010)のマギー・オファレル、『出会いの場所』(2011)のルーシー・コールドウェルなどで、彼女たちの小説は北アイルランド内外の多くの読者の関心を惹いている。[18]

これらの作品は、グレン・パタソンが指摘した通り、たとえ北アイルランド紛争が終わっても北アイルランドの小説は終わっていないことを証明すると同時に、北アイルランドは“Never-ending stories”を提供する場であることを如実に示しているといえよう。

注

1）原題は以下の通り。Joan Lingard, *Across the Barricade*（1992); Jack Higgins, *A Prayer for the Dying*（1973); Gerald Seymour, *Harry's Game*（1975); Benedict Kiely, *Proxopera*（1977); Mary Beckett, *A Belfast Woman*（1980); Maurice Leitch, *Silver's City*（1981); Bernard MacLaverty, *Cal*（1983); Kiely, *Nothing Happens in Carmincross*（1985); Deirdre Madden, *Hidden Symptoms*（1986); Tom Clancy, *Patriot Games*（1987); Glenn Patterson, *Burning Your Own*（1988); Danny Morrison, *West Belfast*（1989); Robert McLiam Wilson, *Ripley Bogle*（1989); Brian Moore, *Lies of Silence*（1992); David Park, *Oranges from Spain*（1990); Daniel Mornin, *All Our Fault*（1991); Ronan Bennett, *Overthrown by Strangers*（1992); Mary Costello, *Titanic Town*（1992); Eoin MacNamee, *Resurrection Man*（1994); Colin Bateman, *Divorcing Jack*（1995）

2）Glenn Patterson, "Never-ending stories", *Lapsed Protestant*（Dublin: New Island, 2006), pp. 158－163.

3）Glenn Patterson, *Black Night at Big Thunder Mountain*（1995）

4）Robert McLiam Wilson, *Eureka Street*（1996）

5）Deirdre Madden, *One by One in the Darkness*（1996）

6）Bernard MacLaverty, *Grace Notes*（1997）

7）Glenn Patterson, *The International*（1999）

8）F. Davenport, T. Downs, D. Hannigan, F. Parnell and N. Wilson, *Ireland*（London: Lonely Planet Publication, 2006), p. 554.
Alan Bairner, "Still taking sides: sport, leisure and identity", *Northern Ireland after the Troubles*, ed. by Colin Coulter and Michael Murray（Manchester: Manchester University Press, 2008), p. 215. のうちに引用されている。

9）Joe Baker, *Offcomer*（2002）

10）Sharon Owens, *The Tea House on Mulberry Street*（2003); *The Ballroom on Magnolia Street*（2004）; *The Tavern on Maple Street*（2005）

11）Sharon Owens, "Why I Chose to Write About a Different Belfast",
（http://www.beatrice.com/archives/）

12）*The Tea House on Mulberry Street*（New York: Berkley, 2005), p. 184.

13）*Ibid.,* p. 111.

14）*Ibid.,* p. 223.

15）Sharon Owens, "Shadows of the past must not be allowed to shape our future", *Belfast Telegraph*, 3 February, 2010,（Online）

16）Maeve Eileen Davey, "'She had to start thinking like a man': Women Writing Bodies in Contemporary Northern Irish Fiction", *Estudios Irlandeses*, Number 5, 2010, p. 13.

17）オウエンスの「ベルファスト三部作」以後の作品は次の通り。*The Trouble with Weddings* or *Revenge of the Wedding Planner*（2007); *It Must Be Love*（2008); *The Seven Secrets of Happiness*（2009); *Emily's Wardrobe or A Winter's Wedding*（2010）

18）原題は以下の通り。Martina Devlin, *Temptation*（2004); *Ship of Dreams*（2008); Claire Allan, *Rainy Days and Tuesdays*（2007); Maggie O'Farrell, *The Hand That First Held Mine*（2010); Lucy Caldwell, *The Meeting Point*（2011）

本稿は、日本学術振興会科学研究費助成（基盤研究（C）：課題番号22520288）による研究成果の一部である。